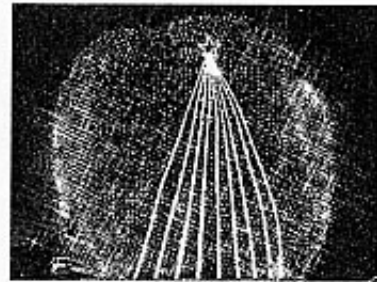


二十四日午後の京都市役所。ロームの佐藤研一郎社長は珍しく公の場に姿を見せ、「美しい街づくりに貢献したい」と笑みを浮かべた。毎年十一月下旬から一月、同市内の本社周辺の並木をイルミネーションで彩る活動で、樹本頼兼市長から表彰を受けたからだ。

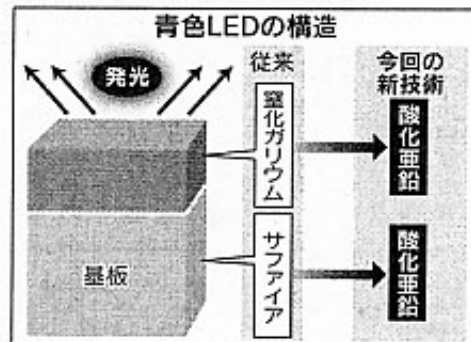
イルミネーションの中でひととき輝くのは、中心となるヤマモモの木だけに飾り付けられるローム製の白色発光ダイオード(LED)。LSI(大規模集積回路)で定評のある同社だが、現在のLED分野での取り組みが注目されている。

ロームが実用化を目指しているのは、安価で大

関西スムーズ



木に飾り付けられたロームの白色LED(京都市のローム本社)



ているとみられる。だが開発意欲は三十年以上なえることなく、今期から東北大学のグループと共同で酸化亜鉛製LEDの実用化に着手した。東北大が成功したLED量産につながる酸化亜鉛の結晶技術に、独自技術を組み合わせる。米調査会社アイサブライの日本法人、アイサブライ・ジャパンによると、〇四年のLED世界売上

世界シェアの二〇%程度を握る、最大手の日亜化学工業(徳島県阿南市)は「素材として窒化ガリウムが絶対ではない(事業企画部)と認める。半面、「ロームの製品がかなりになるのを見極めた」と(同)と、自社の競争力を磨く構えだ。ロームは先月、酸化亜鉛の結晶量産につながる実験装置を本社などに備えた段階。結晶化には成功しても、量産のハードルは決して低くない。「五十年に一度あるかないかの開発。他社が酸化亜鉛をものにしようとしても優位性を保てない(高須本部長)という同社。LSIの製造工程を進める内製化、一貫

ローム 青色LED、酸化亜鉛で

量調達が可能で酸化亜鉛を材料に使う青色LED。高須秀規取締役研究開発本部長は「窒化ガリウムを使った従来品に比べて明るさは十倍規模だ

が、消費電力や販売価格が十分の程度で済む見通し」と期待を込める。同社がLEDを開発・販売したのは一九七三年(億円)の五%、青色だけと比較的早かった。その

後はLSIなどの陰に隠れがちで、現在の売上高は連結売上高(二〇〇五年三月期)は三千六百九十億円、〇八年三月期中にも

アイアから酸化亜鉛に切り替える。約十億円を投じ、〇八年三月期中にも

高は五千五百億円規模。ロームは業界十位に過ぎないが、酸化亜鉛製の量産で計画通り売上高が十倍以上に膨らめば、一挙

バックライト向けに供給に上位に躍り出る。倍以上に膨らめば、一挙

「五十年に一度あるかないかの開発。他社がLEDをつくり広められるか、この二一三年がヤマ(遠西俊洋)

デバイス・エレクトロニクス